「臨床の知」についての考察
―精神分析における「無意識」概念の検討を通じて―

河野　一紀

1.はじめに

筆者が大学院生として在籍している教育学研究科の臨床教育学専攻では、心理的教育的課題に対する専門家の育成を目的としており、その中の教育プログラムの一環として、「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」（京大型臨床の知の創出）という大学院教育改革支援プログラムが昨年度から採択されている。プログラム概要では、「既存の問題に適応することのできる能力だけではなく、錯綜した諸事情のなかから問題を問題として確定し、さらにその問題に具体的に創造的に対応できるメタレベルの能力の養成、「臨床の知」を創出する質的に高度な人材の養成」が本専攻で目指されてきたことが述べられており、心理・教育分野の専門家に求められる臨床実践に資する知として、「臨床の知」という概念が提出されている。

そもそも「臨床の知」という語は、中村雄二郎（1992）によって「科学の知」と対比させて論じられた概念につけられたものである。普遍性、論理性、客観性に特徴付けられた、近代科学を支えてきた一元的な知に対する、オルタナティヴな知の在り方を表すものが中村にとっての「臨床の知」であり、それはコスモロジー、シンボリズム、パフォーマンスに特徴付けられ、個々の場所、時間の中で、対象の多義性を考慮に入れながら、それとの交流の中で事象をとらえる知であるとされている。

河合隼雄（1990、1992ほか）は、中村の「臨床の知」の概念をもとに、心理臨床における知の在り方を考察している。河合（2003）は、「生身の人間を相手にして、現実に生きる問題について共に考えてゆくことは、「近代科学」とは異なる方法をとらざるを得ず、それが科学でないからと言って、間違いとか駄目というのではない、という考えがだんだんと明確になってきた」という自身の考察をふまえ、中村の「臨床の知」という概念が、その「異なる方法」を考える上で有効であることを述べている。近代科学の知が、世界を自分から切り離し観測や研究する、つまり主客分離の上に成り立っているのに対して、「臨床の知」は、世界を自分との関連において、あるいは自分をも入れ込んだものとして考えることが必要であると河合は述べ、「関係性」、あるいは「対象との関係の相互性」が「臨床の知」にとって重要であるという考えを示している。このように、「臨床の知」は、近代科学の知との対比によって論じられてきたという経緯がある。

確かに、近代科学の知に対するオルタナティヴとしての「臨床の知」は、知の多様な在り方を再考する大きな契機となったことは間違いない。しかし、心理臨床というひとつの営みが、その専門性を高め、また社会的な関心も集めている現在、心理臨床という領域固有の立場から「臨床の知」の概念の検討を試みることが必要ではないかと筆者は考える。そこで、心理臨床の領域に

おいて、臨床実践という経験的探求の一部を担っている知や現象から、「臨床の知」について考察を深めることを本論での第一の目的としたい。このような問題意識を受けて、Freud,S.が自身の精神分析の営みの根幹に据えた知であり、様々な変遷を経つつも未だ有効な概念である「無意識」を、本論における「臨床の知」についての考察の出発点に位置づけたい。

そして、この無意識というひとつの知を考察するにあたって、西洋の伝統的認識論における「正当化された真なる信念」という我々が暗黙の内に前提としている知識観との関連から検討し、「臨床の知」という独自の知の在り方を考察することを本論での第二の目的とする。というのも、先に挙げた中村や河合においては、「臨床の知」が「科学の知」と対比されて、方法論的な観点から近代科学の知がとらえられなかった知をいかにして扱っていくかということが論じられていたように、「知」や「知る」といった概念そのものについては考察されていなかったが、無意識を出発点にひとつの知の在り方を考えるにあたっては、「知」や「知る」といった概念や、認識主体と認識される対象といった前提についての、伝統的認識論の根幹に関わるような考察が必要となると筆者は考えるからである。なぜなら、本論から見ていくように、精神分析において扱われる知は、意識という我々が通常、認識主体に想定するものを基盤にすることによっては十分にとらえることができないからである。

本論では、まず無意識という知についてのFreudの基本的な考えを踏まえた後、Lacan,J.とBion,W.R. といった無意識と知について独自の思索を行なった精神分析家を取り上げる。そこから、Freudの精神分析にはじまる心理治療の営みから現在の心理臨床に通底している知の在り方としての「臨床の知」について考察を行なう。その後、伝統的認識論における知の在り方との対比を通じて、無意識を出発点とした「臨床の知」の独自の在り方について論じていく。

それではまず、次章ではFreudが精神分析という学問を構築していくにあたって、無意識をどのような知として位置づけたのか考察していきたい。

2. Freudにおける無意識の知

Freudは、ヒステリーなどの症状の背後に、その原因としての無意識的な心的過程が存在するという考えから出発し、精神分析における知として無意識の概念を構想していった。Freudにおける無意識に特有なのは、無意識は単に意識が知覚しない心的過程であるだけではなく、意識が知覚できない心的過程であるという点である。無意識は意識が知覚することを妨げられた、抑圧された心的過程という力動的な観点から考えられており、それは被分析者の言動の潜在的意味というかたちで、分析家が与える解釈によって分析においてはじめて知られるのであった。Freudによるこのような考えは、被分析者の内に存在するにもかかわらず当人は知ることができないという極めてパラドキシカルな知の在り方を示している。

被分析者の無意識を明らかにする分析家の解釈は夢や様々な言動を対象とする。これは、精神分析における、無意識的思考、葛藤、欲望を間接的かつ形象的に示す表現様式としての象徴という概念に顕著に見られる。Freudは無意識を扱う精神分析を心理治療の方法として創始したのであるが、無意識は医学的な対象となるような症状だけではなく、その代理形成としての機知や失錯行為という日常的にも遍在する現象とも結び付けられた。さらに、「精神的なものそれ自体が

無意識的であるという独自の解釈は、心理学を他の学問と同じように一つの自然科学に発展させることを許す」(1938) と述べられているように、無意識という人間の心的過程を扱う科学的な営みとして、Freudは精神分析を位置づけたのであった。このように人間の心的活動の解明を目指す精神分析は、「他の多くの精神科学、すなわち言語学、神話学、民俗学、民族心理学および宗教学への関係が生じてくる」(1917) と述べられており、実際、精神分析における象徴解釈は、これらの諸領域と関連づけてなされている。Freud自身、夢の象徴解釈を論じるにあたって、神話や民間伝承からのアプローチをする一方で、象徴によって表されているものを性的なものとしてとらえる中で原始語と関連づけて論じてもいる。だが、ここから分かるように、一般に象徴と象徴されているものの関係は明白には述べられておらず、逆に、このように夢を神話や民間伝承と関連づけると同時に原始語とも関連づけて論じることによって、象徴という概念と夢の検閲機能の関係や、夢と幼児期の関連を破棄するかのようにFreudが論を展開していることがPetocz,A.(1999) によって指摘されているのである。筆者も、Freudが精神分析における象徴解釈を既存の学問との連関から展開しようと試みるあまりに、そこでの象徴と象徴されるものの関係を既存の型に当てはめることになってしまい、Petoczが指摘するような矛盾が生じてしまったと考える。確かに、象徴解釈を他の精神科学の知見との関連で考えることは、豊かなイメージを我々にもたらすだろう。一方で、実際の分析においてより重要なのは、象徴解釈が実践において分析家と被分析家との間で行なわれるということであると筆者は考える。すなわち、精神分析における解釈は、象徴と象徴されるものとの関係や、ある言動とその意味を恒常的なものとして規定してしまうのではなく、分析家と被分析家が共有している場で創り出される一回性のものとしてとらえるということが実践においては重視されるのである。

このような考えは、『分析技法における構成の仕事』(1937) においてFreudが解釈に代わって取り上げた構成という技法に顕著に表されている。そこでは、分析家は分析において与えられる断片から，意識から排除され抑圧されたものを復元するといった見解は否定されている。「分析医は、問題となっている諸現象を何一つ体験したわけでもなければ抑圧しているわけでもない。彼の課題は、何かを想起するといった類のものではあり得ない。では、何が彼の課題であろうか。彼は忘れられてしまったことを、それが遺した徴候から推定しなければならない。もっと正確に表現するならば、「構成」しなければならない」のであり、それがどのようになされるのかということは、「分析という仕事の二つの部分のあいだの、つまり分析医に関する部分と被分析者に関する部分とのあいだの結びつき方が決めるのである」とFreudが述べているように、分析で問題となる被分析者の無意識という力動的な心的過程は、分析という一回性の過程において構成されると考えられたのであった。「分析にとって構成は準備処置にすぎない」とFreudが述べているように、構成とは分析における終点ではなく、被分析者に働きかけ、そこから得られた反応を基に更なる構成を行なっていくという極めて創造的な過程と考えられるのである。

このように、精神分析の実践においては分析経験そのものが何よりも重要であり、その実践の中で、自力では知ることができないが自分自身の在り方を規定する知、すなわち無意識が他者である分析家によって被分析者にもたらされるのである。ここでの注目点は、自分自身の言動や思考について被分析者当人以上に分析家が主張しうるということ、すなわち、分析家と被分析者の関係が極端な非対称性に基づいているということである。Freudは、精神分析家を無意識につい

ての知を所有した専門家として、無意識という自らの心的過程に無知な存在である被分析者と極めて対照的に位置づけている。だが、精神分析は被分析者の無意識を分析家が扱うことによって展開していく過程であるため、無意識という観点から考えるならば、被分析者の位置は単なる無知という状態にあるのではない。被分析者は、無意識という未知であるが、自らの在り方を規定するひとつの知を所有している存在という特異な立場に位置づけられているということを我々は見逃してはならない。

では、このような基本的な考察を踏まえて、次章からは、精神分析において無意識と知がどのように論じられてきたのか、LacanとBionの思索から順に検討していきたい。

3.分析関係における知―Lacan

本章では、Lacanにおける無意識と知について、言語と転移といった側面から考察を進めたい。Lacanにとって無意識とは、「無意識はひとつの言語として構造化されている」というテーゼに表されるように、言語と密接に結びつけて考えられている。無意識は人間が言語という象徴的秩序の中に生まれることによって、主体の内に出現するものであった。だが、「…無意識の発見とは、意味の射程は個人の操作する様々な記号をはるかに超えているということでした」(1954-5)とLacanが述べているように、無意識は決して言語という記号によっては汲み尽くすことができない知と考えられている。それは、「記号に関する限り、人間は常に自分がそう思っているよりはるかに多くの記号を駆使している」とLacanが続けて述べているように、記号の過剰としての無知である。このように無意識は、未知にとどまり続ける知であり、言語という象徴秩序の中にある主体と無意識という知の間には避けられない断絶があると考えられた。このような知は、個人によって所有される知、Lacanによってconnaissanceと表現されている知と相容れないものである。connaissanceとは、自我の構成要素である自分自身についての想像的な知であり、それは自我による統制、所有という幻想に基づいた知であるとLacanにおいて考えられている。

主体にとって知り尽くせない知を探求していく精神分析においては、一般的に受け入れられているような無知から知へ直線的に進んでいく進歩主義的な学習観を前提とすることは出来ない。さらに、このことは知と無知の概念そのもの、つまり「知る」いうことと「知らない」ということに対する我々の理解に変更を迫ることになる。精神分析において、無知とは知が欠けた状態などではない。「この無知ということ自体が病気の契機なのではなく、この無知を最初に呼び出し、さらに現在もなおそれを保持している内的抵抗の中に、この無知の基礎が置かれている、という事実こそ病気の契機なのである。この抵抗と戦って、それを克服することが治療上の課題である」(1910)とFreudは述べ、解釈などの分析的働きかけに対する被分析者の抵抗を無意識によるものであると考え、分析の中で扱った。このように、無知とは知ることへの抵抗として考えられ、Lacanは「無知への情熱」(1972-3)と表現している。精神分析はこのような無知の場所を基点に知の在り方を考えていくことになるのである。

このような観点からとらえると、分析家と被分析家との関係において、知はどこに位置付けられるのだろうか。先述したconnaissanceという知に対して、Lacanは精神分析が目指す象徴的次元における知をsavoirという語で表現し、分析における知の在り方について、Lacanは「知って

いると想定された主体」（sujet supposé savoir）という概念を提出している。ここで取り上げられる知、savoirは、「知っていると想定されている主体があれば、すなわち転移があります」（1964）とLacanが述べているように、転移との関連で論じられている。転移は、Freudにおいて陽性転移と陰性転移が区別され、日本語においては「感情転移」とも訳されているように、賛否の感情、態度、判断や評価などと結びついた関係を表す概念として、ここでは広くとらえておく。Lacanは「この人のうちには知があると私が思い込んでいる人は、私の愛を獲得する」（1972-3）と述べているように、分析における転移や愛の関係を、どちらも知を根底に成立している関係であることを指摘している。このように分析を開始させるのは、分析家に対する知の想定であり、実際に所有されている何らかの知ではないとLacanは考えた。「知っていると想定された主体」とは、分析家そのものの在り方ではなく、分析において分析家が取り込むことになるであろう一つの機能あるいは役割と考えられるのである。

このように、分析家に想定された知は分析への導入の役割を果たすが、その後の展開はどのように進むと考えられているのだろうか。伊藤良子（1992）は、「クライエントは、「治す者と治される者」という位置の非対称性ゆえに治療の場にやってくるのであり、そして心理治療が開始されるとは、セラピスト・クライエント関係がこのような非対称な関係にあることを含意しているといわざるを得ないのである」と心理治療の開始における両者の立場の違いをLacanと同様に指摘すると同時に、「それは今後、セラピストがクライエントの問題をすべて引き受ける確約をすることを意味しているのではない。…セラピストは、治療開始時における治療関係が上記のような状況にあることを十分に認識し、ここからクライエントを真に治療に導入し、クライエントが治療の主要な担い手となる道を開かなければならない」と述べている。治療の導入に続く段階では、クライエントの語りに耳を傾ける、すなわちクライエントを無意識について「知っていると想定された主体」と見なすことによって、治療の基盤としての「非対称性の上に成立した相互性」が成立し、転移治癒が起こりやすいと考えられている。その次の段階では、伊藤が「クライエントにとって決して容易な道程ではない」と述べているように、クライエントは自らの内面を語りつくして、人間の生の根源を問う次元に到達する。クライエントは自分自身の中に自らが生きる根拠を見出しえないと気づかされ、その根拠をセラピストにおいて見出すことを求める、すなわち文字通りの「相互性」を求める、特別なひとりの人間として扱うことを求めるとされている。このように、この段階に至ってもセラピストは「知っていると想定された主体」であり続ける。伊藤は、「すべてのクライエントがこの過程にいたるのではない」と述べつつも、この段階からの展開の可能性について、クライエント自らがセラピストの欲望の対象となることによって、自らの生の根源を見出す道を示している。そして、それはセラピストを欲望する存在、欠如する存在とみなすことへクライエントを導くとされている。クライエントは「今まで完全な存在であるべきだと思っていたセラピストもまた、自らの生存の根拠をもたない欠如した存在であることに不思議にも出会わされる」と述べられているように、これは「知っていると想定された主体」の解体を意味する。このことは、「治される者と治す者という「2人」の関係が公の「他者」の場へと開かれ始めたということ」という伊藤の指摘に倣うなら、「知らない者と知っている者という二者が共に知らない者でいることにとどまり始めた」と言い換えることができるだろう。あらゆる人間の知の前提条件には、「自我によるパラノイア的な疎外」（1953）が存在するとLacanは指

摘しているが、それは全知や知の所有といった知識観に基づいた知の在り方であり、パラノイア的な認識を支える知、connaissanceと考えられる。一方で、精神分析で目指される知、savoirはそのような知の在り方を解体し、伊藤が述べるような「象徴的次元における人間相互の「他者性」のもたらされる道」に我々を導くものであると考えられる。

Lacanにとってsavoirという知は、無意識をめぐる分析家と被分析者の二者関係という言語を用いた分析の場からのみ見出されるのである。無意識についての知は、被分析者と分析家が相互に想定することで分析関係を成立、展開させ、我々を他者に開かれた象徴的次元に導くものであるが、それは分析関係を離れて定式化されるような知ではないのである。

4.思考と知るということ－Bion

本章では、Bionにおける無意識と知について、思考と知るという側面から考察を進めていきたい。というのも、「ビオンはフロイト以降に最も明確に精神分析経験を思考の経験と位置づけた分析家である。…ビオンが思考という場合、思考は経験の変容のための手段でもあるが、同時に思考の成熟自体が精神分析の目的にもなっている」と十川幸司（2003）が指摘するように、Bionは思考作用の発生や発達について中心に自らの理論を展開しており、精神病理を、「思考の発達の衰弱か、思考のための、または思考を取り扱うための装置の衰弱か、あるいは両方かと関係している」（1962a）と考えていたからである。ここで、無意識と知に関連させて、思考についての考察を進める前に、思考の機能についてBionとFreudの間には決定的な相違があることをまず指摘しておかねばならない。Freudは、思考の機能を現実原則により引き起こされた緊張の快感原則による低減と結びつけ、欲求不満の除去のための思考というモデルを提示したのに対し、Bion（1962b）は、「現実原則は快感原則と共存して作用する」と考え、思考は緊張を扱う機能をもつ、すなわち欲求不満に耐えるための思考というモデルを新たに提示したのであった。

Bionは、欲求不満に耐えることができるようになることによって思考が成立すると考え、そのことを母子関係における乳児の経験の在り方から以下のように考えている。乳児は外界から様々な感覚刺激を受けるが、それらの多くは無意味で不快なものであるとされている。このような感覚刺激のうち自分の中に抱えておくことができないものが、「投射同一化」（projective identification）によって取り除かれ、母親に向けて排泄される。母親は、乳児が排泄した無意味で不快な刺激を、「夢想」（reverie）という能力によって乳児が耐えられるものに変えて送り返す。これを繰り返すことによって、乳児の欲求不満に耐える能力が増大していき、それが思考へとつながっていくのである。

Bionは、母親が果たすこのような役割をα機能と名づけ、乳児が母親に向けて排泄する無意味で不快な感覚刺激であるβ要素は、このα機能によって、自らの内に抱え思考に利用できるα要素に変換されると考えた。α要素は思考の萌芽であり、α要素どうしが繋がることにより高次の思考が可能になる。Bionによれば、α要素は無意識から意識を区別する「接触障壁」を形成するとされている。接触障壁とは、意識と無意識の区別をつくりだすと同時に、一方から他方へと選択的透過が可能な浸透性をもつ構造であり、夢と同様に保護的な機能を果たすと考えられている。つまり、我々の意識や現実の知覚が無意識的な幻想、衝動、感情によって圧倒されたり歪

められたりしないように、意識と無意識の区別が接触障壁や夢によってなされているということである。

α機能によって、情動的経験の感覚印象は意識的思考に利用できるようになり、それは「経験から学ぶこと」を可能にする。Bionは「情動的経験を関係と独立に考えることはできない」と述べ、精神分析に必要な独自の表記体系として、「愛（Love)」、「憎しみ（Hate)」、「知（Knowledge)」といった三つの基本的関係における結合を表す、L・H・Kという記号を導入した。これらの表記が、面接の参照点として今・ここにおける臨床素材の更なる理解や、今まで意味をなさなかった他の素材をつなげ、統合することを助けるとBionは考えた。

この三つの結合のうち、K結合は分析において重要な「経験から学ぶこと」と密接に関連した結合であると考えられており、xKyというかたちで表される言明は、「xがyと呼ばれる一まとまりの知識を持っているという意味ではなく、むしろ、xはyを知りつつある状態にあり、yはxによって知られつつある状態にあることを意味する」とBionは述べている。Bionにとって思考が欲求不満に耐えることから生じると考えられたように、「知る」ことを表すK結合を特徴づける情動体験は、苦痛や欲求不満を伴う。この状態に対して、「精神分析者にとって重大な選択は、欲求不満を避けようとする手続きと、それを修正しようとするものとの間に存する選択である」と述べられているように二つの道がある。前者の「回避」とは、「xKyが、もはや苦痛に満ちた情動的経験ではなく苦痛がないと想定されたものを表現するように、「xはyと呼ばれる一まとまりの知識を所有している」の意味に置き換えられることによって行なわれる」と述べられているように、知ることに伴う苦痛をβ要素として排泄する防衛的な反応であり、Bionにおいては「理解しないこと、すなわち誤った理解をすることによって構成された結合」として－Kと表される。他方、「修正」は、欲求不満に耐えつつも情動的体験を抽象化することであり、「抽象化の生成はすべて、分析的探求にとって、α機能における因子と想定されることになる」とBionが述べるように、α機能の働きによって思考が発展し、体験をより耐えやすいものに変えていく過程として考えられており、Kと表されるような対象との関係と考えることができる。

このように、BionにおけるK結合、すなわち知るということは、「知りつつある」という状態にとどまることとして考えられている。これに関連して、Freudにおける意識と無意識という区別の代わりに、Bion（1965）は、「分析者は、有限な限界を持たない領域の諸関係を扱わなければならない」と述べ、有限と無限という区別を導入している。Freudは、無意識を仮定することによって意識的な振る舞いが研究される領域を設定したが、この設定が陥りやすいのは、無意識がひとつの心的過程として扱われ、知りつくされるべき対象に成り下がってしまう事態である。K結合が可能であるためには、「疑念に耐えることと無限の感覚に耐えること」（1962b）が必要であるとBionが述べるように、無意識とは我々の内にある心的なものでなく、欲求不満に耐えながら「知りつつある」という状態に我々がとどまるための無限の領域であると考えられる。

Bionにおいての知とは、「知りつつある」という欲求不満を伴った状態に自らを置き、思考によって自らの情動的体験をより耐えやすいものに「修正」していくという在り方として考えられている。それは無意識という無限を領域とした、終点の無い「経験から学ぶ」過程なのである。

5.伝統的知識観との対比から

本章では、先章までで考察した精神分析における無意識と知の在り方を踏まえて、伝統的知識観との対比から「臨床の知」の在り方を考察していきたい。では、伝統的知識観において知はどのようにとらえられているのだろうか。周知の通り、「知識」や「知っている」とはどのようなことか、という問いはSocratesによって初めて明確なかたちで問われた。Platoの『テアイテトス』では、学ぶということについての問いから始まり、知識の吟味が対話を通じてなされていく過程が描かれている。そして、「真実なる思いなしに言論を加えたものが知識だというのです」（1966）というTheaetetusの言明の中に、Socratesによって否定はされているものの、ひとつの知識の定義が見出されている。これを踏まえて、西洋の伝統的認識論において知識は、「正当化された真なる信念」（justified true belief）としてとらえられてきた。[1]知識は信念、すなわち思考状態や心理状態といった命題内容を持つ内的状態を基盤として、それが正当化されたり、真であるという条件が加わったりすることによって成立すると考えられてきた。

このような伝統的認識論においては、知識の定義からも分かるように、信念と知識の区別が重要な問題であり、ある信念が「真」であることや「正当化」されていることはどのように達成されるのかという規範的な問いが、外界とは区別された認識主体、知識主体において問われることになる。すなわち、認識主体、知識主体という外界に対して自律的な個体において、外界をいかにして「真」かつ「正当化」してとらえるのかという、我々の認識における確実性が議論の中心にあった。このような伝統的認識論においては、認識主体と知られる対象との峻別という、中村が「科学の知」に見て取ったような、主客分離の上に成立する知の在り方が見出せる。さらに、重要なこととして、伝統的認識論においては、知は外界ではなく、認識主体としての我々の側に帰せられるものとして考えられているということに我々は注目しなければならない。このような認識論においては、知とは認識主体によってとらえられた外界に関する信念が、何らかの過程を経た後に至るひとつの達成された状態と考えられ、これは知が信念として認識主体の内に所有されるものとしてとらえられるという考えと関連している。

これに対して無意識との関連で論じられる精神分析における知は、主体が知ることのできない知であるという点で伝統的認識論における知と決定的に異なると考えられる。Lacanが「知っていると想定された主体」という語で、知を分析家と被分析者を含んだ分析関係において位置づけ、また、Bionが無意識を無限という概念に置き換え、精神分析における「知る」ということについて論じたように、精神分析において知は認識主体としての個人の内に収まるものではないと考えられている。知は、認識主体に所有されるものではないし、認識主体の内にあるとも言えないのである。では、このように伝統的認識論と精神分析における知の在り方を異ならせているものは何であろうか。筆者は、認識主体を包み込んでいる外界に対する視点、すなわち世界について何が存在するのかといった存在論的な視点への注目であると本論で指摘したい。

認識主体とその対象といった主客分離の上に成立する認識論においても、確かに存在論的な問いは立てられるかもしれない。しかし、それは森際康友（1996a）が指摘するように、「かなり不毛な存在論上の問い」となってしまう。というのも、そこでは「問題の文脈を特定することなく、およそ「外界は実在するか」という問いが、認識対象の存在性格を問う過程で提起され」、もし

このような問いを真面目に受け取るならば、「知識論は、仮に外界が実在したとして、それを人はいかに知りうるのかを問うもの」となってしまい、「これは知識と幻想との区別がつけがたい立場であり、知識論としては拙い哲学である」と考えられるからである。ここで、筆者が考える存在論的な視点とは、認識主体の側からの懐疑論に陥ってしまうようなものではなく、精神分析の実践における分析場面への内在といった在り方に見られるような、我々にとって直接的に受け取られる外界、我々を取り囲む環境に対する視点なのである。

Freudが、無意識を分析家と被分析者の人間関係において見出し、LacanやBionも、無意識というひとつの知を分析の場において、あるいは知るという営みにとどまる限りにおいて問題としたように、知は認識主体としての我々に帰せられたものとしてのみでなく、我々を取り囲む環境の側にも確かに見出されるものである。ここにおいて、知は認識主体としての我々と、我々を取り囲む環境との関係としてとらえることができるだろう。そのような知は、達成される一つの状態や静的で自己完結的なものととらえることは出来ない。精神分析における無意識という知が、分析過程におけるあらゆる事象から考察されたように、このような知は、認識主体によって所有され利用される正しい道具としての知ではなく、認識主体と外界とを含んだ場所に遍在する知と考えることはできないだろうか。森際（1996b）が「知識という環境」と呼ぶ知識観においては、原理的な正しさや行動を規定するほどの強い根拠が欠けた情報があるという状況では、「場としての知識」が形成されており、そのような「知識は自分の置かれている場を定義する重要な要素となると同時に、その場そのものとなるのである。こうした場としての知識の一翼を担うからこそ、個別的な人間的知識は、その場を自己の選好にしたがってより効用の高いものにしていく際の手段としてだけではなく、場所としても機能するのである」と述べている。伝統的認識論における道具あるいは手段としての側面だけではなく、存在論的な視点を導入することで見出されるように、我々がそこにとどまりつつ、知るという営みをなす場としての側面も知はもつのである。

さらに、道具としての知と場としての知との対比を、「知と信」の関係の問題としてとらえることは出来ないだろうか。伝統的認識論においては、知とは「正当化された真なる信念」と考えられていたように、知ることは信じることよりも洗練された在り方であると区別されていた。しかし、本論で取り上げた場としての知の在り方は、我々がそこに内在することによって、認識主体としての我々自身と環境の双方を絶えず変化させていくといったものであると考えられ、そのような知には場を構成し、我々を取り囲む環境・外界への信という要素が不可欠ではないだろうか。そして、このような要素は、BionとLacanそれぞれの考察に見出すことができるのである。

知るという次元になく、直感に頼り一致することによってのみ接近できる分析における「究極的現実」をBionはOと名づけ、「忘却する能力、欲望と理解を回避する能力は精神分析者の必要不可欠の訓練であるとみなされなければならない」（1970）と述べているように、Oと一致するためには記憶・欲望・理解の抑制が必要であると考えた。そして、「もしも願望や記憶が好ましくないのならば、どのような心の状態が良いのかと思われるかもしれない。私が表現する必要のあるものに近似する用語は、「信仰」（faith）―究極的な現実と真実、すなわち未知のもの・不可知のもの・「形のない無限」が存在するという信仰である」とBion（1970）は述べている[ii]。

ここでは、分析家が記憶・欲望・理解を避け、「信仰」という態度を保つことから「信仰の行為」が起こると考えられている。これはBionによる「絶対的な内在の立場の表明」であり、「従

来の超越論の軸の制約に捉われない、新たな経験の記述が可能になる」と十川が指摘するように、Oに対する「信仰」は、Oという未知である現実との既に生起してしまっている関係を信じつつ、その関係において未知のものを知ろうとする状態にとどまるという緊張状態を我々にもたらす場としての知を担うものであると考えることができるだろう。

Eigen,M.（1981）は「Lacanにおいて、信仰の領域は…主に象徴秩序と裂け目という考えと関連している」と述べ、BionにおいてOへの信仰として見出された在り方をLacanにおける主体を取り囲む象徴秩序、言語に対する態度に見て取っている。先述したように、言語という象徴秩序の中にある主体と無意識という知の間には決定的な断絶があった。だが、言葉が語りつくされる地点、すなわち人間が言語に屈する地点において、我々の生の根源が問われ心理治療が展開していく可能性を伊藤が示唆したように、Lacanは言語が分析を展開させていくことを確信しており、故に自らの思索の中心に言語を据えたのであった。「自身の理解を常に超えていく意味の生き生きとした戯れに耳を傾けることによって、主体による自身に関する真実の探究が展開する。ここで信仰が必要となる。人はいかなる根本的な方法によっても現実や意味の動きを支配できない。ただ、持てるだけの洞察の開かれと鋭さをもって、衝撃と発見を通した自分自身の修正にあずかろうとするだけなのである」とEigenがLacanにおける信仰の在り方を取り上げているように、ここでの言語という象徴秩序に対する「信仰」は、分析において話された言語を通じて、無意識という未知との関係に我々をとどまらせる場には不可欠なものであると考えられる。

以上のように、「正当化された真なる信念」という所有された知を扱う伝統的知識観に対して、本章で考察された「臨床の知」は、「いま・ここ」から学んでいくための契機として、我々を取り囲む外界へ信を置いた関係を築き、そこに未知を見出しとどまっていくという緊張状態を支えていく場としての知と考えられるのである。それは、我々と環境との関係を絶えずつくりかえていく再帰的な過程としての知なのである。

6.結論

Freudが提出した無意識という知が、分析関係において扱われることで分析家によって見出される、被分析者の内にある自らに知られない知であるという考察から出発し、知を分析関係において想定され分析を展開していくものと考えたLacanの考察、あるいは「知る」ということを分析関係に内在し未知にとどまる過程と考えたBionの考察といった精神分析における知の在り方を本論ではまず概観した。そこから、伝統的知識観で扱われてきたような、認識主体の内に所有される、道具としての知の在り方ではなく、我々と環境との循環的な過程、あるいは知るという過程にとどまる場としてとらえることができるようなひとつの知の在り方として、本論での目的であった、「無意識」概念の検討を通じての「臨床の知」を見出すことができた。このような「臨床の知」は、心理臨床家とクライエント双方が知ることや理解することへとどまっていく過程を演出するような場としての知であり、社会において他者と共に生きていかざるをえない存在である人間にとって、避けることのできない普遍的な課題を提起するのではないかと筆者は考える。

中村が近代科学の知との対比において「臨床の知」という概念を提唱したのに対して、本論で

は、認識論と存在論という次元から「臨床の知」の在り方を考察した。中村が自身の「臨床の知」を近代科学の知のオルタナティヴと考えたように、本論において無意識から導かれた「臨床の知」も伝統的認識論における知を否定するものではない。しかし、本論において知るという人間の営みを規定してきた伝統的認識論を批判的に考察することによって見出された「臨床の知」の在り方は、河合が注目した「関係性」という概念を新たな視座から再考することにつながるのではないかと考える。だが、「関係性」について、本論での考察をもとに論じていくことについては、残された問題として指摘するにとどめたい。また、本論で提出された「臨床の知」というひとつの知の在り方を、教育学など隣接領域において議論されている知の在り方や、暗黙知や身体知といった伝統的認識論において扱ってこられなかった知の在り方との関連で考察していくことも今後必要であると考えられる。

Freudが医学的な知識はもちろんのこと、文化・文学・言語学など様々な領域における知識に精通していたように、心理臨床家も臨床心理学や精神医学における知識に加えて、それらに関連する様々なことを学ぶ姿勢が求められる。さらに、社会的な視点を持てばクライエントや人々が我々に想定している知に対しても無自覚であってはいけない。だが、我々の専門性は、そのような知を道具的に用いてクライエントや社会に答えていくということではない。心理臨床家としての専門性に関わり、臨床実践において重要となる知は、こころについての様々な知の想定・信頼を引き受けることによって人間関係を築き、そこで出会われる理解できないものや未知のものを理解しよう・知ろうとする試みを支えていく場、あるいは心理臨床家の実践そのものの在り方を示すものとしての「臨床の知」であると筆者は考える。

[i] ここでの信念（belief）とは、ある程度確からしいが正当化されていない心の中の命題といった意味で用いられている。日本語における信念、つまり固く信じ込まれていることといった意味ではないことに注意されたい。

[ii] 邦訳においてfaithの訳語は「信念」となっているが、本論では先述した伝統的認識論におけるjustified true belief（「正当化された真なる信念」）と区別するため「信仰」という訳語を用いた。ただし、「会話上の使用でこの語が備給されている宗教的な意味から区別されなければならない」というBion（1970）の指摘に十分留意する必要がある。

参考文献

Bion,W.R.（1962a）'A theory of thinking'. in *Second thoughts,* London: Karnac Books.

Bion,W.R.（1962b）*Learning from experience.* London: Karnac Books（『経験から学ぶ』福本修訳、『精神分析の方法Ⅰ』所収、法政大学出版局、1999）

Bion,W.R.（1965）*Transformations.* London:Heinemann Medical Books（『変形』福本修訳、『精神分析の方法Ⅱ』所収、法政大学出版局、2002）

Bion,W.R.（1970）*Attention and Interpretation.* London:Tavistock（『注意と解釈』福本修・平井正三訳、『精神分析の方法Ⅱ』所収、法政大学出版局、2002）

Eigen,M.（1981）'The Area of Faith in Winnicott, Lacan and Bion.' in *The*

International Journal of Psychoanalysis., 62 pp.413-433.

Freud,S.（1910）'Über 'Wilde' Psychoanalyse' in *G.W.8*（「「乱暴な」分析について」、小此木啓吾訳、フロイト著作集Ⅸ、人文書院）

Freud,S（1915）'Das Unbewusste' in *G.W.10*（「無意識について」井村恒郎訳、フロイト著作集Ⅵ、人文書院）

Freud,S.（1917）*Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse.* in *G.W.11*（『精神分析入門』懸田克躬・高橋義孝訳、フロイト著作集Ⅰ、人文書院）

Freud,S.（1937）'Konstruktionen in der Analyse' in *G.W.16*（「分析技法における構成の仕事」小此木啓吾訳、フロイト著作集Ⅸ、人文書院）

Freud,S.（1938）'Abris der psychoanalyse' in *G.W.17*（「精神分析概説」小此木啓吾訳、フロイト著作集Ⅸ、人文書院）

伊藤良子（1992）'心理療法過程と治療的変化の諸相'　氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕編 心理臨床大事典[改訂版]　培風館　pp.200-204

河合隼雄（1990）'人間科学の可能性'　宇沢弘文・藤沢令夫・河合隼雄・渡辺慧編 科学とは（岩波講座 転換期における人間）岩波書店

河合隼雄（1992）心理療法序説　岩波書店

河合隼雄・鷲田清一（2003）臨床とことば 心理学と哲学のあわいに探る臨床の知　阪急コミュニケーションズ

Lacan,J.（1953）'Some Reflections on the Ego'. in *The International Journal of Psychoanalysis., 34* pp.11-17.

Lacan,J.（1964）*Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse,1964.* Le séminaire de Jacques Lacan livre11,Paris :Seuil（『精神分析の四基本概念』小出浩之他訳、岩波書店、2000）

Lacan,J.（1954-5）*Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse,1954-1955.* Le séminaire de Jacques Lacan livre2, Paris : Seuil.（『フロイト理論と精神分析技法における自我』小出浩之他訳、岩波書店、1998）

Lacan,J.（1972-3）*Encore, 1972-1973.* Le séminaire de Jacques Lacan livre20,Paris :Seuil

森際康友（1996a）'知識はどのように成り立ち、何の役に立つのか'　森際康友編 知識という環境　名古屋大学出版会

森際康友（1996b）'知識という環境'　森際康友編 知識という環境　名古屋大学出版会

中村雄二郎（1992）「臨床の知」とは何か　岩波書店

Plato（1966）テアイテトス　田中美知太郎訳　岩波書店

Petocz,A.（1999）*Freud, Psychoanalysis and Symbolism.* Cambridge University Press.

十川幸司（2003）精神分析（思考のフロンティア）岩波書店

平成19年度大学院教育改革支援プログラム教育プログラムの概要および採択理由 http://www.jsps.go.jp/j-daigakuin/data/07_sinsa/A024.pdf

付記

本論文は、平成20年度大学院GP研究開発コロキアム「心理臨床における「知」について―「非日常性」という概念を手掛かりに―」での研究をもとにして執筆された。

（臨床心理実践学講座　博士後期課程１回生）

（受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日）

A Study on "Clinical Epistemology" : Through Consideration of the Psychoanalytical Concept of "Unconscious"

KONO Kazunori

In this paper, the concept of "clinical epistemology" was considered through the psychoanalytical concept of "unconscious." First, the concept of "unconscious" was argued through the psychoanalytical works of Freud, S., Lacan, J, and Bion, W.R. In Freud, "unconscious" was thought of as a paradoxical mental process one possesses but can't know by oneself. In Lacan and Bion, "unconscious" was not a mental process or located in one's inner space. With reference to Lacan's term, "*sujet supposé savoir*," (subject supposed to know) and Bion's concept of "K linking," it was considered that "unconscious" appeared and came into one's own only in analytical relationship, and that there was no end in our knowing "unconscious." Then, through the comparison of psychoanalytical epistemology with "unconscious" and traditional epistemology, where the definition of knowledge has been "justified true belief," the concept of "clinical epistemology" was considered from the ontological viewpoint. Clinical epistemology is not just a piece of knowledge to be possessed; it is like a field where we are made to cope thoroughly with the unknown. It is not evaluated in explaining the fact, but makes it possible for us to recognize a "here and now" relationship and to venture into the unknown psychotherapy and our own life.